

弘法大師生誕1250年記念「利根運河大師めぐり」資料 2023・4

弘法大師

弘法大師空海は宝亀5年（774）6月15日、讃岐国多度津郡（現善通寺市）に生まれた。西暦に変換して7月27日としているものもあるが、高野山では6月15日としている。生家は郡司を務める家柄であったという。15歳のとき京に出て勉学に励むが、その後阿波や土佐の室戸崎で修業、20歳で出家。22歳で空海と名乗る。31歳のとき遣唐使と共に入唐して修行に励んだ。42歳のとき四国各地をまわり修行や布教をしたことから、その徳を求めて巡礼する四国八十八か所霊場が生まれた。

今年は大師の誕生から1250年の記念すべき年に当たる。仏教では生まれた年を1年としているので、高野山では今年を生誕1250年としている。

利根運河大師の歴史

江戸時代になると関東からも四国八十八か所や西国三十三か所めぐりに出向くものが多くなった。やがて四国霊場の写しの新四国八十八か所霊場が各地に設置されるようになった。流山の市域にも文政元年、鱈ヶ崎東福寺を中心とした二十一か所霊場が設けられた。文政6～8年頃には、二十一か所霊場を拡大する形で新四国江戸川八十八か所ができた。旧新川村では明治33年、熱心な大師巡礼の信者であった下花輪の秋元吉平を願主として、新川村八十八か所の設置が決まった。大師堂の設置場所は村内の寺院22か所に各4体の大師像を祀るものであった。しかし、設置事業の半ばにおいて新川村を襲った大水害のため断念、完成を見ることはなかった。一方、東葛地方では弘法大師の徳を仰ぐべく霊場巡りの希望者が増えつつあった。しかし、鉄道敷設が拡大していたとはいえ四国はあまりにも遠く、気軽に遍路することはかなわなかった。

以上のような背景のもと、利根運河大師の設置を計画推進したのが利根運河会社の支配人であった森田繁男であった。森田は運河橋際に果樹園（3町余＝9000坪余＝3ha余）を経営していた。農園は運河事業が衰退傾向にある中、利根運河への集客を担っていた。園内にはブドウ、モモ、ナシなど数万本が栽培され収穫時には船着き場が客でにぎわったという。森田は大師の徳をこの地に招くべく、新四国八十八か所霊場の設置を計画した。霊場創建趣旨には「偉大ナル大師ノ徳ヲ運河沿岸ニ建立シ併セテ大師堂ヲ運河果樹園へ建設シテ弘道ヲ説キ衆生救度スルノ便ニ供セントス」とうたった。まさに四国霊場の設置は弘法大師の徳を広め、悩める衆生を救うことを目的としたものであった。いわば近隣町村の大師信仰に応えるものであった。

森田が近隣町村有志に呼び掛けたところ、88を超える申し込みがあった。しかし89番目の申込者を断ることに忍び難く、番外として89番札所を建立した。かくて利根運河大師

霊場は89か所となった。お堂は運河沿岸に建立した。また、廃寺同然であった市野谷円東寺の所有権を譲り受け、果樹園1反歩に円東寺（大師堂と教会堂）を移し新たな堂宇を建立した。場所は運河橋を野田方面に渡った道路と線路の間の地であった。

大正2年5月21日、果樹園内に建立された大師堂、教会堂で新四国八十八か所利根運河霊場の入魂供養が行われた。供養を先導したのは光明院の住職椎橋盛範であった。大師堂には発願所の一番札所と結願所の八十八番札所が安置された。なお、堂境内には大師を安置した12のお堂が建立された。これは遠方の師守の便を考え、運河駅から至近の堂境内に設置したという。

昭和17年1月、利根運河会社および利根運河はその使命を終えて国に売却された。さらに運河堤防もかさ上げされた。運河沿いにあったサクラは伐採され、立ち並んでいた店や大師堂も撤去された。大師堂は師守や寺院に引き取られ散り散りになった。行き場のなかった大師像は運河大師堂境内（円東寺）に移されたが、運河大師堂も荒れ果てていった。森田木三郎は円東寺の所有権を市野谷に返還し、昭和46年8月、市野谷に円東寺が再建された。返還と共に運河大師堂（旧円東寺）境内にあった大師像は市野谷の円東寺に移された。

その後、東深井中学校社会クラブや柏市の有志らが大師の所在を調査し名簿も作成した。巡礼も復活した。それらの動きに呼応するように、昭和61年、流山、柏、野田の有志により利根運河霊場再建発起人会が結成された。平成2年、実行委員会が設立された。平成8年4月21日、運河河畔に利根運河大師堂が建立され落成法要が行われた。大師堂には円東寺にあった18体の大師像が遷座された。現在、不明であった大師像も再造され堂内に20体、堂敷地内に2体、計22体の大師像が安置されている。

再建実行委員会は利根運河大師護持会と名称を変えて現在に至っている。